

〔解説〕 平定安南戦圖

高田時雄

臺灣の平定戦争がようやく終熄を見た乾隆53年（1788）、安南すなわち今日のベトナムの地でも雲行きがすこぶる怪しくなってきた。まさに空前の大叛亂が起きようとしていたのである。世にいう西山黨の亂というもので、ベトナムの中南部平定省西山を根據地とする阮氏三兄弟が領袖となって引き起こされ、この亂はやがて王朝の轉覆にまで發展する。清朝は宗主國としての立場からやむを得ずその解決に乗り出さねばならなかった。その意味で事情は臺灣の場合とはかなり異なっていた。

ところで西山黨の亂に至るまでのベトナムの歴史はかなり複雑である。この叛亂の由來とその歴史的意義を知ろうとすれば、迂遠なようでもやはりそれまでのベトナムの歴史を簡単に眺めてみる必要がある。

南北分裂の時代

話は西山黨の亂から遡ること250年ばかり以前のこと、黎朝の權臣莫登庸^{マク・ダンズン}が恭皇帝に迫って王朝を篡奪し、新たに莫朝を開いた。1592年のことである。莫朝は昇龍城^{タンロン}（今日のハノイ）に君臨して五代65年のあいだその命脈を保った。また一方で一旦王統の途絶えた黎朝であったが、阮氏をはじめ舊臣たち莫氏に反對する勢力によって、1533年、黎氏の後裔黎寧^{レ・ニン}を擁立してラオスとの國境地帯に亡命政權を樹立した。かくしてベトナムでは黎朝と莫朝という二つの王朝が併存し、互いに相争う状態になった。もともと黎寧を擁してその命脈を保たしめた第一の功臣は阮滄^{グエン・キム}であり、黎朝亡命政權を牛耳っていたが、その死後權力は女婿の鄭檢に歸すことになった。鄭檢の子である鄭松は後繼者となった兄を殺すと、新たな君主を擁立して實權を掌握した。さらに勢いに乗じてハノイに進撃、1592年ついに莫氏を滅亡せしめたため、その勢威はいよいよ盛んとなった。しかし莫氏の殘黨は中國に近い高平^{カオバン}の山岳地帯に落ち延び、中國の暗黙の支持を得て、その後も地方政權として一定の勢力を維持し續けた。

それ以前、鄭檢在世時すでに鄭氏が權力を確立しつつあるころ、兄の阮汪が不慮の死を遂げるなどのことがあり、自身にも危険が忍び寄っていることを察知した阮滄の子阮^{グエン・ホアン}潢は、自ら願い出て中部のフエに鎮守として赴くことにした。鄭檢の夫人である姉の玉寶の口添えもあり、その許しは首尾よく認められた。かくしていわゆる廣南の阮氏政權が誕生することとなった。ベトナム南北分裂のきっかけである。さてその後、阮氏は南方に向かって版圖を擴大するなど鋭意勢力擴大に努めたものの、なお鄭氏に正面切って對抗し得ないことを心得ていた。そのため黎朝に對し人質を差し出し、貢物を納め、極力友好的な關係を保持することに努めた。ただ黎朝を實質的に支配する北方鄭氏と、やはり名目上黎朝に服屬する南方阮氏との對立は次第に激化していくこととなる。

1620年、阮潢の後を襲った福源に對して不満をもつ弟たちが鄭松の子鄭^{チン・チャン}樞に通じ、鄭氏の兵を呼び込むとともに、内からもこれに呼應して擧兵するという事件が起こった。結局このクーデタは成功せず收束を見たものの、この事件を契機として阮福源は黎朝への貢納を斷固拒否する擧に出た。鄭氏側はそれを待っていたかのように、黎朝の救命として人質と象、海船の提供、さらに高平の莫氏討拔に兵を出すことを要求した。阮福源がこれを承諾することはあり得ず、1627年ついに鄭氏と阮氏のあいだに戦闘が開始された。十萬の大軍を繰り出して南方に侵攻した鄭氏に對し、兵力の上では阮氏はすこぶる不利を強いられたが、陸上には諸處に堡壘を築き、海口にも鐵鎖をめぐらして防備に努め、さらにポルトガル人の援助もあり、鄭氏を撃退することができた。なによりも阮氏にとっては氣候風土とも自分たちのよく知る、住み慣れた土地での戦闘であったことが有利にはたらき、また鄭氏の側では背後に莫氏の脅威を抱えていたことなどが災いした。しかし戦争は泥沼化し、一進一退が繰り返された。1672年に、鄭氏による再度の大規模侵攻が行われたものの、やはり阮氏によって撃退された。

その後戦いは一段落し、百年ばかりのあいだ南北勢力が共存するという状態に入った。この間、北の鄭氏は黎朝の天子を廢絶させることはしなかったものの、王號を稱し、内治においても法制を整備するなどして、絶對權力を確立するとともに、高平に據る莫氏を撃滅させる（1677年）など國力の充實を圖った。また南の阮氏は南方進出に一層邁進し、チャンパ王國の故地を併合したほか、メコン河下流のカンボジアにも觸手をのぼし始めた。内政でも独自の制度を發展させ、税制、兵制を整備して、國力は著しく伸張した。

西山黨の亂

亂の首謀者は西山の阮氏三兄弟、阮文岳^{グエン・バンナク}、阮文呂^{グエン・バンリュ}、阮文惠^{グエン・バンフエ}である。同じ阮氏でも、廣南の阮氏とは何の所縁もない¹。阮文岳等の祖先はもと父安省興元^{ゲアン・フングエン}の人であったが、その四世の祖が黎朝の盛徳年間（1653-58）、鄭氏と阮氏の戦いにおいて阮氏側の俘虜となり、西山に移され、さらに父の福の代になって堅城に移り、三人の子をもうけたものである。長男の岳は最初、芙（すなわち蒟醬^{キンマ}）を山地民族に賣り歩くことを生業としていたが、のちに雲屯の巡卞吏（税吏）となった。その時に税錢を使い込んで、それが發覺、厳しい追及を受けたために、山に入り盜賊となった。それ以前に文岳は教獻という人物の一黨に加わっていたことがある。教獻は文岳に對し「西起義、北收功」という^{よげん}讖を授け、そなたは西山出身だから、せいぜい勉めよと諭したという²。

さて廣南の阮氏政權では、阮氏一族と同郷の清化人^{タンホア}を優遇重用する傾向が極めて強く、重要な武職は彼らによって獨占され、また阮氏は彼らと姻戚関係をむすび、強固な門閥が形成されていた。そして西山の亂が起こる頃には、阮氏の實權はやはり清化の名門の出である張福巒^{チョン・フクロアン}の手に握られていた。張福巒は幼い阮福淳（睿宗）を擁立し、攝政として權勢を恣にし、私利私欲を圖って暴政を行ったために、人々の不満が増大していた。その政治には阮氏一族や門閥貴族のなかからも反對の聲が擧がったが、張福巒はこれらを武力で彈壓した。またこの頃、天候不順でしばしば饑饉が起こり、流民が発生した一方で、過酷な税の取り立てが行われ、民衆の怨聲は止むことがなかった。阮文岳の擧兵には、こうした背景があったのである³。阮文岳に豫言を與えて勉勵した上掲の教獻という人物はもともと、張福巒の睿宗擁立劇における政敵であった内右大臣張文幸の門客であったとされるから、教獻が阮文岳を煽動して叛亂に至らしめたということは大いに理由のあることで、とすれば西山黨の亂の遠因は宮廷における政争にあったとも言える⁴。

1771年、ついに擧兵した叛亂軍は、1773年には地方の中心都市歸仁^{クイニョン}を陥落させると、ベトナム国内の華人にも義軍を率いてこれに投ずるものがあって、威勢大いになり、またたく間に廣大な範圍をその支配下に置いた。北方の鄭氏はこれを絶好の機会と見、叛亂の平定を名目として軍を南に進め、阮氏の都城フエを占領した。阮氏一族はやむなく南に逃亡し、嘉定^{ジァディン}（サイゴン、現在のホーチミン）に落ち延びた。阮文岳は十分に形勢を見極め、一旦鄭氏に降伏するかたちを取って

¹西山阮氏はもと胡姓であったが、移住地での便宜を考えて阮姓を名乗ったものという。松本信廣『ベトナム民族小史』（1969年、岩波書店）、121頁。

²『大南正編列傳初集』卷三〇「阮文岳傳」。

³藤原利一郎「西山黨の亂の勃發事情についての一考察」『史窗』第24號（1965）、53-68頁。

⁴藤原上掲論文、62-63頁。

和睦し、北邊の安定を確保すると、兵を南に進め、サイゴンに餘喘を保つ廣南阮氏の殘黨覆滅を圖った。1777年、弟の文呂、文惠たちはサイゴンに侵攻し、さらに逃れる定王はじめ王族のほとんどが殺害された。唯一生き残ったのは阮福映^{グエン・フクアム}で、この人物はシャムなど各地を流浪し、臥薪嘗膽、長い雌伏の期間を経て、ついに西山黨の支配を打ち破り、新たな阮朝を開くことになるが、それはずっと後の話である。ともあれ西山の阮文岳は1778年、泰徳の年號を建て王號を稱したのである。

阮文岳は南方平定の餘勢を借って、弟の阮文惠等に北方侵攻を命じた。西山軍は1786年フエを奪取、さらに勢いに乗って進撃を續け、鄭氏の都城昇龍（ハノイ）を占領し、鄭氏を滅亡に追い込んだ。しかし阮文惠のこの北進は兄の阮文岳の命令を逸脱して行われたもので、これが後に兄弟のあいだに確執を生むきっかけとなった。ともあれハノイを陥れた西山軍は、黎朝の昭統帝（黎維祁^{レ・ズイキ}）を推戴して南方に退いた。翌1787年、阮文岳は獲得した領土を三分して、阮文呂を東定王としてコーチシナを、阮文惠を北平王としてフエから北部ベトナムとトンキンを支配させ、自らは中央皇帝を稱してクイニョンを首都と定め、ベトナム中部を支配する體勢をとった。しかし阮文岳と阮文惠とのあいだに生じた龜裂はいっそうの擴がりを見せ、やがては武力をもって相争うまでになった。

その頃、先に滅ぼされた鄭氏一族の殘部がトンキンで叛亂を企てたので、阮文惠は再度ハノイへ兵を進め、これを占領した。しかし昭統帝黎維祁は阮文惠の支配を嫌って北方に逃れ、清朝に援助を請うた。1788年（乾隆53年）5月から6月にかけてのことであり、この黎維祁の内附によって、いよいよ乾隆の安南平定戦争が始まることになる。六枚の銅版畫はこの平定戦争の各段階の場景を描いたものである。

安南平定戦争

黎維祁の援助要請を受けて、當時兩廣總督であった孫士毅は、阮文惠の討拔と、黎維祁の復位を名分として、國境の兵に臨戦態勢を命じる一方、乾隆に奏上して如何にすべきかの裁可を求めた。とりあえず國境地帯の戦備を強化することで、清朝側に斷固たる意志のあることを示し、戦わずして内訌を收束させることが出来るかもしれぬという目算もあった。それに對し、乾隆の下した上諭は「安南はこれまで清朝に對し臣服すること最も恭順であったが、いま強臣の篡奪するところとなり、わが國に亡命してきた。もしこれを捨て置くようでは、“字小存亡”（小[國]の存亡を^{いつくし}字む）という道義に背くというものである。もとより兵力を結集して、討拔して阮文惠の罪を問うべきだ」というのであった。西山黨を討拔して黎氏の危急を救うことは、宗主國としての責任だというのは正論である。しかしこれに藉

口してベトナムに侵攻することで、安南を清朝の完全な屬國に出来るかも知れないという思惑が存在したことも否定できない。廣西巡撫の孫永清は一貫して介入に消極的であったが、孫士毅のほうは大いに功名心が働いたらしい。乾隆の態度にも一貫性が缺けていた。乾隆ははじめ出兵を命じたものの、さらに密敕をもって進軍を遅らせ、まず黎氏に舊臣を糾合させて阮文惠に對抗させ、幸いにそれで阮軍が退却すれば、黎氏軍の後を追って清軍を進撃させること。それが叶わず阮文惠が退却しなければ、福建・廣東の海軍をもって順化、廣南^{フエ}を攻め、同時に陸からも兵力を繰り出す。さすれば阮文惠も必ず降伏するであろうから、その時は阮文惠を順化、廣南に、黎維祁を北部に封じて、それを清軍の統制下に置けばよいとという、まことに都合のよいプランであった。これは清朝側の記録には見えないが、後に孫士毅が敗走したときに、この旨を記した乾隆の上諭が道に打ち捨てられたのを、阮文惠が入手したと伝えられる⁵。必ずしも事実かどうかは不明だが、最初に軍を動かす段階で、決断を缺く面があったことは清朝側の記録によっても想像できる⁶。こういった戦略上の不徹底がこの戦争を泥沼化させ、大きな犠牲を強いられることになる。いずれにせよ清朝が阮文惠の力を見くびっていたことは否定できない。

乾隆53年(1788)10月28日、孫士毅の主力軍は提督許世亨とともに兩廣の兵一萬を率いて鎮南關を出た。そのうち八千の兵をもってハノイを衝き、殘餘の二千は國境の町諒山^{ランソン}に待機させた。中國からベトナムへ入る道としては、廣西の鎮南關を經るこの道が正道である。また雲南の提督烏大經も兵八千を率い、開化廳の馬白關(現在の雲南省文山壯族苗族自治州馬關縣)を經由して渡河し、ベトナムに侵攻した。主力軍の編制は、總兵の尚維昇と副將慶成が廣西兵を、總兵の張朝龍及び李化龍が廣東兵を率いた。黎朝の舊臣など義勇兵も隊列に加わり、まさに破竹の勢いで進軍した。大軍來るの報に、阮文惠の軍は雪崩をうって退却した。嘉觀訶訕^{ザークワン}之戰【第一圖】と三異柱右之戰【第二圖】はともにその情景を描いている。嘉觀^{ハーホー}と訶訕^{タムジー}、また三異^{チュフ}と柱右^{バクザン}は、すべて北江省の、西はルクガン(Luc-ngan)、東はソンドン(Son-dong)の地域内に含まれる小村落名であるらしい⁷。したがってこの二つの圖はそれぞれが一つの戦役を描いたものとも見られるし、またこれらの地域に互って展開された戦闘の二つの情景とも考えられる⁸。

いずれにせよ戦線を持ち直すために阮文惠の軍は三江⁹の險を防衛線として防戦

⁵鈴木中正「乾隆安南遠征考(上)」『東洋學報』第50卷第2號(1967)、4-5頁。

⁶同上、6頁以下。

⁷Emile Gaspardonne, Les victoires d'Annam aux gravures de K'ien-long, *Sinologica*, Vol.4, 1956, p.6.

⁸Gaspardonne, op.cit., p.6.

⁹三江とは、北から南に、それぞれ壽昌、市球、富良江をいう。最後の富良江はまたソンコイ川、

に努めたが、清軍の勢いを食い止めることは叶わなかった。清軍は諒山から先は二手に分かれて進撃していたが、11月13日には、尚維昇と慶成の廣西兵一千餘が^{トースオン}壽昌江に達した。時は夜明け間近、退いた阮軍は南岸に陣取っている。浮橋が断たれると、兵は筏に乗って突進した。混亂した阮軍は霧の中で、同士討ちを演じる中、清軍は渡河を完了し、大いに敵を打ち破った。ちょうど張朝龍等の廣東兵が柱石で阮軍を破った頃である。【第三圖】の壽昌江之戦には、渡河する清軍と、敗走する阮軍の様子が描かれている。

11月15日、清軍は^{ティカウ}市球江まで兵を進める。ここはすでに^{バクニン}北寧境で、ハノイまで30キロの地點である。川幅が寛く、また南岸が北岸よりも高い地形になっている。阮軍はその南岸に砲列を敷いて撃ちかけてくるため、筏を組むこともままならない。ただ河が灣曲していて、敵方の見通しが利かないのを幸い、竹や木で浮橋を作るように見せかけておいて、二千の兵を上流20里の流れの穏やかな地點から宵闇に紛れて小舟で渡河させた。こうして17日の攻撃は、正面から筏で南岸に迫る一方、上流から回り込んだ伏兵が喊聲とともに高處から背後を襲ったので、敵は清軍がどこから出現したかと思うまもなく、瓦解し壊滅してしまった【第四圖】。

19日、清軍はついに^{プールオン}富良江に到達する。河の向こうはすなわち國都昇龍城の城門である。阮軍は沿岸の竹木をすべて切り拂い、船をすべて南岸にあつめさせ、防御態勢を布いた。しかしすでに敗色の濃い阮軍の士氣は擧がらず、陣形も整わない。清軍は遠くから小舟を調達すると、それに百餘の兵を載せ、夜中に河中まで出撃し、敵の戦艦一隻を奪取、それに二百の兵を載せ、それを許世亨がみずから率いて渡河した。さらに三十餘の小舟を入手、それを使って次々と二千の兵を渡河させ、敵の陣地に突き進んだ。敵は闇みの中で混亂爲す術を知らず、壊滅した。敵の船十數隻を焼き拂い、また總兵、侯、伯など數十名を捕獲した【第五圖】。

續く【第六圖】は、阮惠（すなわち阮文惠）が^{おい}姪の阮光顯を清朝に遣わし、乾隆が宴を賜った時の圖である。奇妙なことに、平定安南戦圖全六圖は、その間に存在すべき戦争の場景を一切描いていない。それが悲惨な負け戦だったからである。敗戦の情景を描くことは乾隆の自尊心がそれを許さなかったのであろう。とはいえそのことに觸れなければ、賜宴まで辿り着くことができない。

ハノイを陥したあと、孫士毅は黎維祁に冊書と印璽を與えて安南國王に封じた。しかしハノイまで来た清軍は、兵站を維持することができず、それ以上の南進が困難な状態にあったうえ、黎氏政權は自立することはおろか、ほとんど機能すらしていなかった。一方、廣南にある阮文惠はすこぶる意氣軒昂で、自ら帝を名乗り、泰徳11年を光中元年と改元すると、ふたたび長驅北上してきた。その陣容は戦象

江河とも稱する。

數百匹をふくむ十萬餘の大軍であった。消耗しきった清軍には、徹底抗戦を唱える阮軍の大攻勢をはね返す力はなかった。かくして乾隆54年（光中2年、1879）の正月3日から5日にかけてのハノイにおける戦闘で、清軍は壊滅的な敗北を喫し、提督許世亨、總兵張朝龍、李化龍などが戦死した。

清廷では、ハノイ進駐後、情勢分析を行い、さらなる南進は不可能な上、さらに黎氏政權がもはや當てにならない以上、早期撤兵やむなしという考えに傾きつつあった。その最中の正月25日、に大敗北の知らせが届いたので、乾隆は福康安を兩廣總督に任命し、事態の收拾に着手した。清朝側に媾和の意があることを知った阮文惠は、背後に歸仁の阮文岳勢力が存在することを考慮して、名目的に清朝に投じることとし、使者を派遣し、安南國王に封じられたしという申し入れを行った。この時清朝はすでに黎氏を見捨ててはいたものの、阮氏側の表文中に穩當でない表現があったりしたために、交渉は一旦決裂した、使者もフエに引き上げてしまった。しかし福康安が鎮南關に到着して、様々な懷柔工作を行ったのが奏效して、阮氏側もついに媾和に應じ、^{おい}姪の阮光顯を入覲させることとしたのである。

賜宴と安南平定圖

さて阮文惠の親姪阮光顯は請降使として4月19日に入關、福康安と面會した。阮光顯は乞降の表文と貢物とをもって入京することを願い出るとともに、阮文惠自身にも入京の希望があることを傳えた。そのニュースが5月3日に朝廷に達すると、乾隆は非常に喜び、さっそく阮文惠を安南國王に封ずる用意のあることを諭した。その後の折衝には曲折があったものの、6月中には、翌年8月に豫定されている乾隆の八旬萬壽慶典に阮文惠自身が參列することが決定された。そこで乾隆はそれに先だって册封使を派遣することを表明した。

さて請降使の阮光顯は7月の末に熱河に着き、避暑山莊で乾隆に拜謁した。第六圖はその時の賜宴の様子を描いたものである¹⁰。ところで中國側には親姪阮光顯として伝えられているこの人物の素性については、實は大いに疑問がある。4月19日の福康安との會見において、彼は阮文惠の長兄で早逝した阮光華の息であると主張したというが、阮氏は上述の如く三兄弟であって、このような長兄がいたことは信じられない。また亡命した黎氏の忠臣も阮光顯は阮文惠の姪などではないと證言したとも言われている¹¹。ベトナム側は清朝に對して、あかかもその歸服が

¹⁰賜宴の場所は避暑山莊内の卷阿勝境であった。『高宗實錄』卷1335（『清實錄』第25冊、1094頁）の乾隆54年7月條に「戊申、安南國正使阮光顯、副使阮有暉、武輝璫、並行人等入覲、上御卷阿勝境召見」と見えている。

¹¹鈴木中正「乾隆安南遠征考（下）」『東洋學報』第50卷第3號（1967）、85頁。

うわべだけのものであることを宣言するかのようになり、その後もこうした偽計を畫策するのである。清朝は知ってか知らずか、見て見ぬふりをせざるを得なかった。

清朝の冊封使成林は豫定より遅れて8月27日に鎮南關に到着した。すると阮文惠はハノイではなくフエまで来てほしいと言い出したため、その調整に時間を要したばかりでなく、阮氏側は氣候がどうか、阮文惠が病氣になったとかいう理由をつけて事あるごとに遷延を圖り、結局成林は10月14日にハノイに到着して、翌15日に式典を執り行くと、匆々歸途に着いた。實はこの時も、冊封に臨んだのは阮文惠ではなく、替え玉の范公治という人物であったと伝えられている¹²。

替え玉はさらに乾隆の八旬萬壽慶典でも用いられた。ベトナム側の傳承では、乾隆55年の春になって、もともと約束されていた阮文惠自身の入京の準備が一向に行われぬのを見て、福康安がみずから替え玉派遣を提案し、先に冊封の時に用いた范公治を派遣することになったのだとする。言い出したのが福康安であるか否かは問わず、福康安はおそらくそのことを知っていたであろうが、素知らぬふりをして為すがままに任せた。結果としては何事もなく、替え玉は破格の待遇と多數の下賜品を頂戴して歸國した。阮文惠は詭計の成功にさぞほくそ笑んだことであろう¹³。

このように平定安南圖は決して史實の全貌を忠實に描いたものではなく、清朝にとって都合のよい勝利の戦闘場面と、阮氏の請降使を熱河の離宮に迎えて清朝の威勢を示す場面だけが採用されているわけである。乾隆の武功を誇示するのが目的である平定圖であってみれば、これは當然すぎる事柄であるとはいえ、史實との懸隔においてこれほど甚だしいものはない。

乾隆はみずからの武功を記念して、これまで西域平定圖、金川平定圖、臺灣平定圖を描かせ、銅版で印刷させてきた経緯がある。やはり今回もそれを繼續する必要がある。乾隆はやや後ろめたい気持ちを押しさえつつ、それを實行に移した。勝利の場面だけが描かれるべきなのはもちろんである。

さてその安南圖であるが、乾隆54年7月末に阮氏の請降使を熱河に引見してからしばらく後、宮中の内務府造辦處が9月16日に發送した平定安南國戰圖の畫稿6張が、10月23日に熱河にもたらされ、上覽に供された¹⁴。ところがその稿本を目にする少し前の10月19日に、乾隆は造辦處に對し具體的な注文を出している。それは姚文瀚、楊大章、賈全、莊豫、黎明、伊蘭泰という6人の畫家に對して平定安

¹²鈴木中正「乾隆安南遠征考（下）」、89-91頁。

¹³しかし阮文惠の絶頂期は長く續かず、かつてみずからが逐った廣南阮氏の阮福暎との抗争の最中、1792年に没し、息の阮光纘が跡を繼いだが、1802年にはついに阮福暎によって滅亡することとなる。フエの西山朝は15年にも満たない短命な王朝であった。

¹⁴『清宮内務府造辦處檔案總匯』（北京：人民出版社、2005年）第51冊、512頁。

南國戰圖の畫冊を高一尺七寸二分五厘（52.27cm）、幅二尺八寸三分五厘（85.91cm）のサイズで宣紙上に描くように、さらに紫光閣の武成殿に掲げるためのものとして、これは高一枚が高一丈二尺八寸（387.9cm）、幅一丈二尺六寸（381.8cm）のサイズで姚文瀚、賈全、伊蘭泰の3人に對し絹に描くように命じたものであった。この命令は11月3日に内務府に届いている。命令が行き違いになって、この具体的な指示を待たずに畫稿が熱河に届けられたのは、おそらく安南についても戰圖を作成すべきことがそれ以前すでに命令されてあったのであろう。ともあれ前者の畫冊の各葉が銅版畫の下繪のもとになったことは明白である。ではいつ銅版畫が出来上がったのであろうか。内務府銅版處の檔案に、乾隆59年5月24日付けの敕旨として、總管内務府大臣に對して印刷の仕上がった安南戰圖219分を各處に配布させたことが見えている。219分のうち、25分が冊子に表装され、24分が匣に收められた¹⁵。したがってこの頃に安南戰圖は完成したものと見てよい¹⁶。

¹⁵『清宮内務府造辦處檔案總匯』第54冊、370頁。

¹⁶前注に挙げた檔案には、同時に西域戰圖を19分、金川、臺灣、安南三處の戰圖を各20部増し刷りする旨の指示も見えている。安南の文字が間違いでなければ、これ以前にすでに安南戰圖の銅版畫は完成していたことになる。ただし219分とこの20分増し刷りがどういう関係にあるのはよく分からない。

〔解説〕 平定狝苗戦圖

高田時雄

平定狝苗戦圖は一名雲貴戦圖とも言われ¹、嘉慶二年に起こった農民起義軍平定戦争を描いた銅版畫で、以下の四枚の圖からなる。

1. 「剿捕狝苗南籠圍解」
2. 「攻克洞洒當丈賊巢首逆七絡鬚王囊仙就擒」
3. 「攻克北郷巴林賊巢擒獲首逆王抱羊苗疆底定」
4. 「剿淨狝苗餘黨全黔底定」

この叛亂はすでに乾隆が退位した嘉慶二年に起こった事件で²、乾隆の銅版畫得勝圖のシリーズの中では最後尾に位置するものである。以下、簡単にこの戦圖に描かれた事件の顛末につき、簡単に紹介しよう³。

中國は多民族國家で、国内に多くの少数民族を抱えていることは周知の事實である。これらの少数民族は固有の信仰と生活習慣をもって、有史以來長く中國の領域内の各地域に生活基盤を築いてきた。元、明以來、中央政府は西南地域の少数民族支配者をそのまま州縣の知事（土官）や軍事指揮官（土司）に任じて、その世襲支配を容認してきた。このシステムを總稱して土司制度というが、その制度下にあつて彼らはその社會構造をさほど大きく變えることなく、自身の文化的傳統を保持することが出来た。ところが明代中期以降、次第にこの土司を中央政府が直接に任命派遣する流官に變えていこうとする改土歸流の動きがはじまり、清

¹『造辨處圖目』『清宮史續編』などには「御筆平定狝苗戦圖」の名で出しているが、『盛京典制備考』には「雲貴戦圖」として見える。Walter Fuchs, Die Schlachtenbilder aus Turkestan von 1765 als historische Quelle, nebst Bemerkungen zu einigen späteren Serien, *Monumenta Serica*, 1939, p.119.

²この時、乾隆は退位したものの、なお政治の實權を掌握していた。各圖に加えられた御製詩には、「乾隆丁巳」（第1圖～第3圖）と「乾隆戊午」（第4圖）の紀年が見える。卒爾に干支のみを見れば、それぞれ乾隆2年、3年と考えてしまいかねないが、これが嘉慶2、3年であることはいうまでもなく、落款には「太上皇帝」とある。乾隆が嘉慶の年號を用いていないのが注意される。

³李尚英「嘉慶二年的王囊仙起義」『清史研究』1993年第2期（總第10期）は、「剿捕檔」等の一次史料を用いて、この戦争の經過を詳しく描いている。また『清代嘉慶年間貴州布依族“南籠起義”資料選編』（1990年、貴州民族出版社）附載の周春元・王燕玉等「嘉慶初王囊仙和韋阿信領導的布依族人民的起義」も、主に地方志を用いて簡潔な概觀を與える。ともに有用な論考であるが、小文の記述はとりわけ多くを前者に負っている。ここに謹んで感謝したい。

朝の雍正年間^{オルタイ}に鄂爾泰が雲貴總督となって以来、精力的に改土歸流政策が施行されていった。改土歸流はこれらの地域に一定の社會經濟的發展をもたらしたことは事實であるが、また漢族が大量の入り込んできたことで、少数民族に対する政治的及び文化的壓迫が強化されたことは否定できない。苗族など西南部の少数民族は窮乏化し、清朝の役人や地主に対する不満は増幅して、乾隆末年には一觸即發の状態にあった。

そういった背景のもと、乾隆60年(1795)に苗族を中心とする大叛亂が勃發した⁴。はじめ貴州の松桃廳(現在の貴州省松桃苗族自治縣)から火の手が上がった叛亂は、瞬く間に貴州、湖南、四川の境界地域の多くに擴大し、石柳鄧を領袖とする叛亂軍は30萬とも稱し、侮りがたい勢力となった。さすがの清朝もこれには危機感を抱き、これを速やかに制壓すべく近隣各地から多数の兵を調達することとなった。貴州南籠府(現在の貴州省黔西南布依族苗族自治州安龍縣)の清軍も例外ではなく、多くの兵力が石柳鄧の制壓に動員されてしまったため、現地の治安維持がすこぶる手薄になった。

嘉慶二年(1797)の正月、南籠府下の當丈寨で狛苗族(布依族)⁵の首領韋朝元(七縉鬚)とその部下王阿祿(大王公)たちが相談の上、彼らのあいだで影響力の大きい洞洒寨の巫女王囊仙を領袖に戴き、起義の旗を掲げることに決定した。彼らは王囊仙を「皇仙娘娘」と尊稱し、年號を「仙大」とした。彼らは近隣の苗民を糾合して、南籠府城を包圍するとともに、近邊各地の縣城の襲撃を開始した。2月には廣西の苗民とも連絡をとり、擧兵への参加を求めた。叛軍の勢いは盛んで、防備が手薄になっていた清軍は爲す術を知らず、雲南方面との連絡は途絶した。南籠の知府曹廷奎はみずから首を縊って果て、城内の人は多くが城の東20里の坡壘山に逃れた。ただ一部のものは食糧の確保につとめ、義勇兵を募って籠城し、叛軍の執拗な攻撃をしのぎ、その後攻圍の解けるまで半年のあいだ城を守り抜いた。

乾隆は南籠叛亂の報を聞くや、彼らが湖南の苗族と氣脈を通じて連合するようになることになれば厄介なことになるとして、湖北で白蓮教徒の叛亂平定に当たっていた雲貴總督の勒保^{レイバオ}(1739-1819)を急遽南籠に派遣して、亂の速やかな平定を命じた。勒保は命を受けて急行し、戰略上、安順府永寧州(現在の貴州省關嶺布依族苗族自治縣永寧鎮)の北に位置する關嶺から兵を進めることとし、乾隆の批准を得た。乾隆はまた賊の逃亡を防ぐため、東西南北の要所に防備の兵を送り込んだ。配備が

⁴この叛亂の顛末は別途、平定苗疆戰圖に描かれている。

⁵清代の南籠府の地が今では布依族苗族自治州となっているように、この地方には布依族と苗族とが共存している。當時狛苗(仲苗)と稱したのは布依族のことで、タイ系の言語を話す民族である。一方、^{ミャオ}苗族は、ミャオ・ヤオ系で、系統的には異なる。この叛亂には布依族だけでなく、本来の苗族も参加したはずだが、小文では兩者を「苗」で概括して區別しない。

定まるのを待って、勒保は鎮寧から關嶺に向けて晝夜兼行、進軍を開始した。關嶺の手前まで来たところで、勒保は一隊を分けて嶺の背後に回り込ませた上で、自身は本隊を率いて正面から進撃した。かくして激烈な戦争がここを舞臺に繰り広げられたが、突然、背後から清軍が現れたため、叛亂軍は狼狽爲すところ無く、打ち破られてしまった。清軍は關嶺を攻略したあと、さらに軍を進め、永寧、歸化などの圍みを解き、途上の苗族部落を歸服させつつ、南籠府に向かった。一方で、一部の叛軍は廣西に退却し、同地の苗民と連合したため、廣西の西隆州（現在の廣西壯族自治區隆林各族自治縣）に戦線が擴大しつつあった。王囊仙と韋朝元たちは、南籠を圍んだあと、清の援軍がやってくるとの報を聞き、城の西北にある碧峰山に陣取って、砦を築き、道路を遮断し、石橋を打ち壊して⁶、進攻に備えた。

5月上旬、勒保と總兵の珠隆阿は碧峰攻略を開始した。輕舉妄動は一切慎み、砲聲の合圖をまってはじめて一齊攻撃することに打ち合わせ、同時に山下にも伏兵を配置した。戦端が開かれるや、山上から數千の叛軍が押し寄せ、本營間近に迫ったが、砲聲の鳴り響くや、伏兵が飛び出し、それとともに本營の兵も大いに繰り出したので、挟み撃ちの格好になり、叛軍は大敗を喫した。清軍は進んで、南籠への要路を扼する羊腸山に至ったが、叛軍側は險阻なこの山に柵を築き、頑強な抵抗を續けた。

戦況が必ずしも意の如くではないのを見て、勒保は一計を案じ、投降した苗族の王登榮等を敵陣に送り込み、内應させることとした。雨の中、幾つかに隊を分かった清軍が、まさに斜面を上りつつ攻撃を仕掛けている頃合い、王登榮が砦の中で火を放って呼應した。瞬く間に、砦は明々と火に包まれ、その混亂に乗じて、清軍はまんまと羊腸山を奪取した。さらに進んで、清軍が南籠への隘口である水烟坪に至ったところで、叛軍の更なる抵抗に出會したが、隊を分かって敵を各個撃破し、ついに水烟坪を落とした。いまや南籠は目前である。かくして6月には、南籠近邊の苗寨の多くが投降歸順した。ここまでくると敵の威勢にもはや昔日の面影はなく、南籠城外の今一つの據點である普坪も陥落し、叛軍の幹部の一人大王公が戦死した。韋朝元は大王公の後繼に王抱羊を指名し、抵抗を繼續させた。しかし6月末、勒保が總兵の張玉龍と副將の施縉をそれぞれ二手に分けて、一舉に南籠城下を衝かせると、叛軍は抵抗できず、半年に及ぶ南籠城の圍みはここに解除されることになった。乾隆はその報に満足し、特に詔を下して南籠府を改め興義府とした。

【第一圖】はこの南籠府城の解放を描いたものであることは言うまでもなく、左上方に見えるのが南籠城である。しかし畫面に描かれる各戦闘の場景は必ずしも

⁶ちなみに第一圖には、真ん中の部分の破壊された石橋が描かれている。

同時のものとは思われない。おそらく圍みの解除にいたるまでの各戦闘がパッチワークのように雑多に寄せ集められているのであろう。

その後、閏6月、勒保は西隣の黄草坝（現在の貴州省興義市）に進撃し、雲南方面からの援軍とともに、この地を叛軍を打ち破ったので、長く杜絶していた雲南貴州を結ぶ道が確保された。こうして清軍は叛軍の本據である洞洒、當丈兩部落に向けて最終段階の進攻撃を開始することになった。叛軍は石の砦を築き、柵を二重にめぐらし、内に銃や石を配置して防備に努めるとともに、敵に降った近隣の苗寨を焼き拂って、清軍に内應できないようにし、また永豊（現在の貴州省黔西南布依族苗族自治州貞豊縣）と捧鮓（現在の貴州省黔西南布依族苗族自治州捧鮓鎮）の攻圍を強化して、清軍部隊の分散化を圖った。叛軍にとっては精一杯の防衛努力であったが、これではとても清軍の進撃を食い止めることは不可能である。7月、勒保は隊を分かって永豊と捧鮓の救援に向かわせると、みずからは本隊を率い、敵の本據めがけて進撃した。近邊にある部落はすべて投降したため、敵は洞洒と當丈の二部落に立て籠もるかたちとなった。7月末から8月初めにかけて、捧鮓の圍みが解けたので、その兵力も合流して來た。そこで洞洒と當丈に最後の攻撃を仕掛けることとなり、8月15日、勒保は兵を8隊に分け、洞洒と當丈を同時に攻撃した。洞洒寨では2、3萬人が密集して防衛に当たり、鐵砲と石で應戦、必死の抵抗を繰り広げた。清軍は二重になった柵を、外柵、次いで内柵と掘り崩して、通路を切り開き、寨内に突入した。叛軍はもはや支えきれないと見るや、次々と^{とりで}碉樓に逃げ込んで火を放った。それを見て、都司の王宏信が燃え上がる火をものともせず、碉樓の一つに突入し、火傷を負った王囊仙を引き出して捕獲した。こうして洞洒寨は陥落した。一方、當丈寨のほうも攻撃は順調で、千總の洪保玉が韋朝元（七絡鬚）を生捕りにした。この日の戦闘で、清軍は1萬から2萬の叛軍を殲滅し、千餘の首級を挙げ、2千6百餘人を鹵獲した。【第二圖】がこの時の勝利を描いたものである。

ちなみに亂の首魁に祭り上げられた王囊仙は、本名王阿崇（あるいは阿從）、乾隆42年（1777）に當地の布依族の貧しい農家に生まれた少女で、当時わずか20歳であった。男勝りの勝ち氣な性格で、小さい頃から武術を習った。ある日、山で牛を放牧している時、一個の五色に輝く^{ベツプル}鵝卵石を拾った。遠近の部落のものたちは皆、五色の石は天上の神がこの娘に下されたもの、この娘は仙女が地上に舞い降りてきたものだ、と言い觸らした。そして厄除けや病氣の治療に至るまで、部落のあらゆる問題は王囊仙に頼るようになった。王囊仙は武術の修行に勵む一方で、巫として醫療を行い、草藥で多くの病氣を治したが、一切の費用は受け取らなかった。こうして王囊仙はこのあたりで知るもののない存在となったのである⁷。

⁷羅汎河「布依女杰王囊仙」『貴州文史天地』1998年第3期、33頁。

したがってこの度の一揆で、王囊仙が首魁として擔ぎ出されたのは理由のないことではない。

戦闘終結後、捕らえられた王囊仙は、韋朝元ほか他の3名の首謀者とともに大きな木製の籠に押し込められ、北京に護送、處刑された⁸。清朝の刑律にしたがい、謀反大逆の重大犯として、凌遲⁹の法によったものと伝えられる。現在、王囊仙は地元で民族英雄として高い評価を受け、1991年に高さ2.2メートルの記念碑が建立され、また1998年には高さ5メートルの銅像が作られた¹⁰。

さて話は戻って、8月15日の戦闘で王囊仙たちが捕らえられた後のことをもう少し付け加えねばならない。勒保は功績によって、侯爵に列せられたが、乾隆はなお繼續努力して永豊、册亨（現在の貴州省黔西南布依族苗族自治州册亨縣）の攻圍を速やかに解除し、もう一人の首領である王抱羊を捕縛することを命じた。そうでなければ叛亂の根を絶つことはできまい。勒保はそこですぐさま興義府の北郷に向い叛軍の掃討に当たった。8月下旬、清軍は額老寨を攻撃、王抱羊は頑強な抵抗を見せたが、結局惨めな敗北に終わった。勒保は戦闘で重傷を負った王抱羊を捕らえ、磔刑（凌遲に同じ）に處し、遺骸を晒した。【第三圖】は王抱羊を捕獲した北郷における戦いを描いたものである。勒保はさらに進んで、永豊を圍む叛亂軍を撃滅し、城を解放した。9月15日、乾隆は永豊州を貞豊州と改め、官民が城を固守したことを表彰した。かくして亂は終結を見た。

ところで平定狛苗戦圖にはなお一枚、【第四圖】が加えられている。圖に附された乾隆の御筆詩の紀年を見ると、これだけが「乾隆戊午新正」すなわち翌嘉慶3年（1798）正月の作であることがわかる。その詩題には「雲貴總督鄂輝、狛苗の餘黨を剿ち淨し、全黔（黔は貴州のこと）底定れるを奏報す。詩以て慰^{やすらぎ}を誌す」とある。狛苗平定戦を指揮した勒保は嘉慶2年9月中に、すでに湖廣總督に遷っており、その後を承けた鄂輝^{エホイ}¹¹が雲貴總督として、いわば亂の殘黨狩りを擔當していたのである。その鄂輝から貴州全土がすべて平定された旨の報告があったのを聞き、詠んだのが第四圖の御製詩で、圖はもとよりその殘黨狩りの様子を描いたものである。

⁸9月に貴州から護送された王囊仙等は、嚴重な監視の下に、各省を経て、嘉慶2年10月16日に河南省新野縣に入り、同28日に磁州を出て直隸に至った。『清代嘉慶年間貴州布依族“南籠起義”資料選編』、170-171頁。處刑の日付は嘉慶2年11月7日、西曆では1797年12月24日のことであった。

⁹生きたまま少しずつ肉を切り取り、長時間苦痛を與えて死に至らしめる刑罰。

¹⁰羅汎河上掲文、36頁。

¹¹鄂輝（?-1798）は臺灣平定戦争にも参加した將軍で、その功績によって紫光閣に肖像が掲げられた。その肖像畫が現存していることは平定臺灣圖の解説中で觸れておいた。